

教育方法の特色化を図る英語モジュール学習の実践
に関する研究：
教職大学院の支援による英語モジュール学習の成果

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山崎, 保寿, 梅田, 晃 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00010274

教育方法の特色化を図る英語モジュール学習の実践に関する研究

—教職大学院の支援による英語モジュール学習の成果—

Study on the Practice about English Module Learning for Particularities of the Educational Method:
Result on English Module Learning Supported by the Profession Graduate School

山崎 保寿¹・梅田 晃²

Yasutoshi YAMAZAKI, Akira UMEDA

（平成 28 年 10 月 3 日受理）

The purpose of this study is to develop and practice English module learning by using the system of the profession graduate school. The main conclusion of this study is following three points. (1) Considering the present conditions of the teaching profession graduate school, it is important to develop active learning type curriculum which has a high contribution for the community. (2) On the occasion of developing English module learning, three psychological factors; "desire of autonomy", "desire of ability" and "desire of relationship" were adopted. English module learning of seven processes promoted the communication between students. (3) Students more than 90% were able to work on English module learning eagerly. By the result of the second inventory survey, approximately 30% of students increased the desire of "reading" and "writing".

【キーワード】 中学生の英語力育成、英語モジュール学習、アクティブラーニング、教職大学院、学校における実習、現職院生

1 教職大学院の現状および課題の設定

我が国では、社会のグローバル化、国際化の急速な進展により、英語力育成の重要性が高まり、学校教育に対して効果的な英語学習導入の要望が強まっている。平成20年に改訂された現行学習指導要領では、小学校第5・6学年に「外国語活動」が導入され、中学校の「英語」が原則履修として明確に位置づけられた。次期学習指導要領においても、中学校において、アクティブラーニング型の指導によるコミュニケーション能力の向上と英語力の育成が重視されている。次期学習指導要領では、小学校第5・6学年の英語が教科化されることにより、10～15分程度のモジュール学習や帯学習と呼ばれる短時間学習の導入が検討されている。これにより、中学校で開発される英語モジュール学習の方法が、小学校における英語モジュール学習のモデルとなることが期待されている。

こうした動向を踏まえると、次期学習指導要領の方向に沿った特色ある教育方法の開発は、

¹ 教職大学院系列

² 掛川市立大須賀中学校

教師の実践的指導力の向上と教員養成の高度化を目指す教職大学院においても重要な課題である。本研究の目的は、教職大学院の必修科目として設定されている「学校における実習」において、教職大学院の実習システムを活用した英語モジュール学習を開発し、実践することによって、その成果を検証し今後の課題と展望を明らかにすることである。この問題意識に立ち、以下では、教職大学院の現状を踏まえたうえで、本研究の課題を示すことにする。

(1) 教職大学院の現状

教職大学院は、高度専門職業人としての教員養成に特化した専門職大学院として、平成20年度から全国的に開設された。開設数は、初年度が19、平成22年度に25、平成27年度に27、平成28年度には18大学を加え、45となった（表1）。平成28年度における教職大学院の定員総数は、国立39校が1054人、私立6校が170人、合計1224人である。教職大学院創設の背景には、社会の急激な変化により、グローバル人材の養成や新たな学習方法の導入が求められること、また、子どもたちの学ぶ意欲の低下や自律心の不足、いじめや不登校の深刻化など、学校教育が対応しなければならない課題が従来以上に増加してきたことがある。そのため、新たな教育問題に迅速かつ適切に対応しうる高度な専門性と組織的対応力を備えた教員の養成が求められているのである。

表1 教職大学院開設数の推移

年度	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28
公立	15	18	19	19	19	19	19	21	39
私立	4	6	6	6	6	6	6	6	6
合計	19	24	25	25	25	25	25	27	45

こうした役割と期待を担って設立された教職大学院では、とりわけ現職院生に関しては、地域や学校における指導的役割を果たし得る教員としての資質・力量の向上が求められており、そのために不可欠な確かな指導理論と優れた実践力および応用力を備えたスクールリーダー（中核的中堅教員）の養成が目指されている。

(2) 静岡大学教職大学院の状況

静岡大学大学院教育実践高度化専攻（教職大学院）は、平成21年度の開設以来8年目を迎えている。定員は20名であり、そのうち15名が現職院生である。平成27年度からは、県教育委員会が大学院への研修支援制度を発足させ、さらに2名の現職院生が入学している（表2）。教職大学院の教育内容に関しては、研究者教員と実務家教員の共同により、事例研究、授業分析、教育理論検討、教育政策研究、先進校訪問、アクションリサーチ（AR）、課題研究などを取り入れ、教職大学院設置の趣旨に沿った確かな指導理論に基づいた実践的指導力の向上を目指した教育および研究を行っている⁽¹⁾。

表2 入学者数の推移 定員20名、()内は現職院生数

年度	入学者数	備考
H21	23 (14)	研修等定数による現職派遣 14 名
H22	21 (14)	
H23	20 (15)	高校教員の現職派遣が加わり 14+1 名
H24	19 (15)	
H25	19 (15)	
H26	20 (15)	
H27	22 (17)	研修等定数による現職派遣 15 名、県の研修支援制度 2 名
H28	24 (17)	研修等定数による現職派遣 15 名、県の研修支援制度 2 名

静岡大学教職大学院のカリキュラムに関しては、図1に示したように、1年次に主に「共通科目」(22単位)、「選択科目」、「基盤実習」(3単位)および「領域別実習」(3単位)を配置し、2年次に主に「選択科目」、「学校改善力高度化実習」(4単位：現職院生向け)、「学校改善力育成実習」(4単位：学卒院生向け)、を配置している。それらを通して身に付いた知識や技術が、大学における授業と学校等における実習との間で往還しつつ統合されて生かされるよう体系的なカリキュラム系統に基づく科目配置を行っている。教員養成の高度化が展望される中で、教職大学院が地域と連携した効果的な実習プログラムを開発することが大きな課題となっている⁽²⁾。

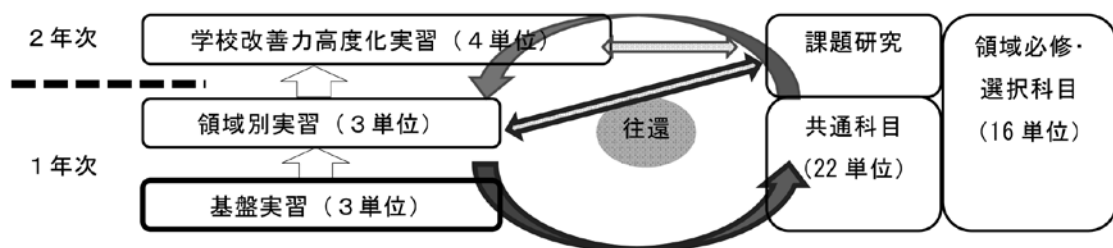


図1 実習科目の配置とカリキュラムの全体構成

(3) 課題の設定

こうした状況にあって、各教職大学院においては、実習科目をいかに効果的に実施し、その成果を学校や教育委員会への貢献性の高いものにしていくかが大きな課題となっている。そこで本研究では、静岡県K市に所在するA中学校学区において強い要望があった英語学習について、教職大学院の人的資源を「学校における実習」を通じて投入し、実践した結果について報告するとともに、その成果を検証し今後の課題と展望を明らかにするものである。ここで、教職大学院の人的資源とは、K市教育委員会から派遣されている現職院生（梅田）とその指導教員（山崎）である。実践した英語学習の方法は、アクティブラーニングを取入れたモジュール学習を中心にした方法である⁽³⁾。

以上を踏まえ、本研究の課題として、以下の3点を設定する。

- (1) 教職大学院の現状を踏まえたうえで、現職院生が在籍する地域と連携した貢献性の高い実習カリキュラムとして、英語モジュール学習の方法を開発する。
- (2) 中学校の英語教育に関する文部科学省の施策動向を踏まえ、事例校においてアクティブ

ラーニングを取り入れた英語モジュール学習を実践し、その効果を検証する。

- (3) 教職大学院が地域と連携した実習カリキュラムを開発、実践することによって、一層貢献性の高い教職大学院を目指す方向とその在り方について今後の展望を示す。

2 英語モジュール学習の目的

2020年度の東京オリンピック・パラリンピックを見据え、新たな英語教育を展開するために、文部科学省は平成25年12月に「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を発表し、小学校・中学校・高等学校を通じ、先導的な取組や教員研修を実施してきた。しかし、高校3年生を対象とした文部科学省の平成26年度「英語教育改善のための英語力調査」の結果では、4技能の全てにおいて課題があり、また、「英語教育実施状況調査」から、中学生の英語力に関しても改善が見られていないことが明らかとなった（文部科学省「生徒の英語力向上推進プラン」2015年）。

このような背景の下、文部科学省は平成27年6月に「生徒の英語力向上推進プラン」を策定した。その具体的な取組は、①都道府県ごとの目標「GOAL2020」の設定及び公表、②都道府県別の英語力の結果公表、③中3生を対象とした全国テストを複数年に一度実施、④中・高・大での英語力評価および入学者選抜における英語4技能を測定する民間の資格・検定試験の活用促進である。特に、中学生に対しては、平成29年度までに50%以上の生徒が卒業段階において英検3級程度の学力を身に付けることが求められた。

同プランが公表されたのと時を同じくして、静岡県K市立A中学校区では、区民から「A中学校の生徒に英語力をつけてもらいたい」との要望が、市民総代会の場で挙げられた。同会には、市長、市教育委員会学校教育課長、並びに筆者（山崎）が出席しており、この関係から、静岡大学教職大学院に派遣されている現職中学校英語科教員である梅田が、学校における実習（アクションリサーチ）として、A中学校生徒の英語力向上のための取組に着手することになった。

以上の経緯から、中学生に、「英検3級程度の英語対話力」を身につけさせるための教育プログラムを開発することが本研究の重要な課題である。ここで、岩崎（2014）は、生徒の実態を適切に把握したうえで、生徒の特性に適した学習スタイルで指導することの重要性を指摘している⁽⁴⁾。特に、英語に苦手意識をもつ生徒に対しては様々な学習スタイルを組み合わせることで指導することが効果的なことを明らかにしている。

そのため、A中学校において、英語モジュール学習（15分間）を行うこととし、その際に用いる教育方法や教育内容を開発することとする。その実践の成果を、生徒の変容に関する質問紙調査を通して検証する。事前の生徒観察や、校内定期テストの分析、質問紙調査（第1回）から、生徒の英語学習に対する姿勢は必ずしも肯定的とはいえ、英語に対して大きな壁を感じている生徒が多かった。このため、研究第I期（平成28年1月～3月）⁽⁵⁾においては「生徒の英語に対する壁を下げることを目標として設定し、英語学習に対する意欲についての質的な変容を目指すこととした。そこで以下では、教職大学院の「学校における実習」を活用して実践した英語モジュール学習が、生徒たちの英語に対する意識をどのように変容させたかについて考察する。

3 英語学習の意欲に関する調査（第1回質問紙調査）

モジュール学習開始の約1か月前である平成27年12月11日に、生徒の英語学習への意欲に関

するアセスメントを行うため、第1回の質問紙調査を実施した。英語学習の意欲と意識に関する質問項目は、表3に示した全17項目であり、有効回答率は100%であった。調査対象は、モジュール学習を実施する第2学年36名である。表3における【 】内の数値は各質問項目（5段階法）の平均値である。

これら全17項目を、「英語学習の意識に関する」9項目と「英語技能への意欲に関する」8項目に分け、グラフ化したものが図2、図3である。

この結果、まず、「英語学習の意識に関する」項目については、図2の上位3項目の結果から、「英語を使えるようになりたい」「英語の勉強は大切である」「進路や将来の仕事に役に立つ」という項目に対する肯定的回答（「4.どちらかというと思う」＋「5.そう思う」）が、いずれも80%を超えている。このように、英語の意義について、A中学校2年生では肯定的な考えを抱いている生徒が8割以上いる一方で、図2から、「英語の勉強が好きだ」「英語を生かして将来仕事をしたい」と答える生徒は4割程度以下であった。この点について、「平成15年度小・中学校教育課程実施状況調査」（国立教育政策研究所、2003年）によると、5割強の中学2年生が「英語学習が好きである」と答えているが、同じ趣旨の質問である表3（1）および図2（1）に関しては、A中学校2年生では4割強にとどまっている。英語学習の意義に関する肯定的な回答の割合は、ベネッセの全国的な調査⁽⁶⁾と比べても、A中学校2年生では同等かそれ以上である。このことから、生徒の英語に対するあこがれや学びたい気持ちは高いものの、実際には英語学習が思うようにうまくいかず、困難を抱えている生徒が多いことが明らかになった。

次に、「英語技能への意欲」に関する項目については、図3から、「外国の人の話を理解したい」「メディアからの英語を理解したい」などの「聞くこと」に関する項目、また、「外国の人と気軽にしゃべりたい」という「話すこと」に関する項目に対して、向上意欲が高いことが分かった。しかし、「皆の前で英語で自分の考えを発表したい」という項目は肯定的回答が最も少なく、生徒が英語で自分の考えを発表することの苦手意識が影響していることがうかがわれる。

表3 英語学習に対する意識（第1回質問紙調査）

質問項目【平均点】
(1)英語の勉強が好きだ。【3.3】
(2)英語の勉強は大切だと思う。【4.4】
(3)英語を使えたら、自分の進路や将来の仕事に役に立つと思う。【4.3】
(4)英語を使えるようになりたい。【4.6】
(5)英語を生かして、将来仕事をしたい。【2.8】
(6)英語は他の教科に比べて得意な方である。【2.5】
(7)英語は他の教科に比べて学びたい気持ちが強い。【3.7】
(8)英語の授業で友達と関わりながら学ぶのは楽しい。【3.8】
(9)「外国の人の話を理解できたらいいな」と思う。【4.4】
(10)「テレビやインターネット、ラジオなどから流れる英語を理解できればいいな」と思う。【4.0】
(11)「外国の人と気軽にしゃべりできたらいいな」と思う。【3.8】
(12)「みんなの前で、英語で自分の考えを言えたらいいな」と思う。【3.3】
(13)「英語で書かれた雑誌、新聞、webサイトなどを読んで情報を理解できたらいいな」と思う。【3.6】
(14)「英語で書かれた本を読んで、理解できたらいいな」と思う。【3.5】
(15)「英語で作文や日記などを書けたらいいな」と思う。【3.3】
(16)「英語でメールなどを書き、メッセージを発信できたらいいな」と思う。【3.4】
(17)英検を受けてみたい。【3.4】

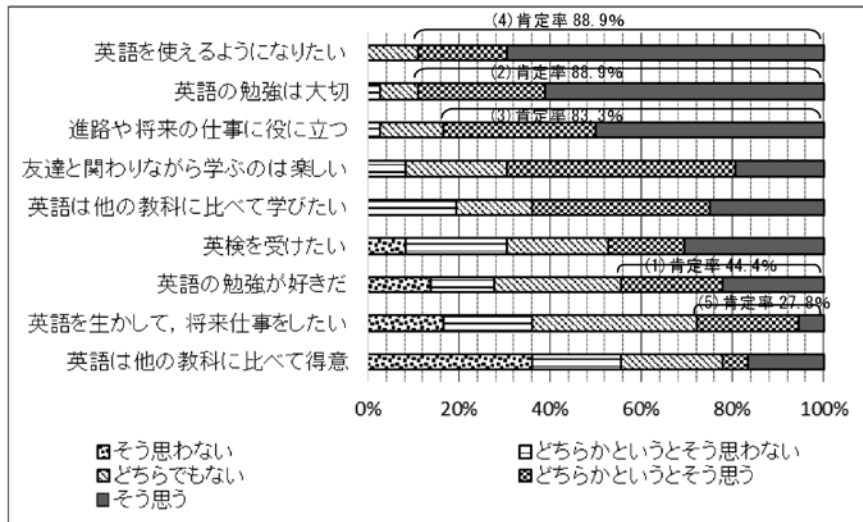


図2 英語学習に対する意識 (n=36)

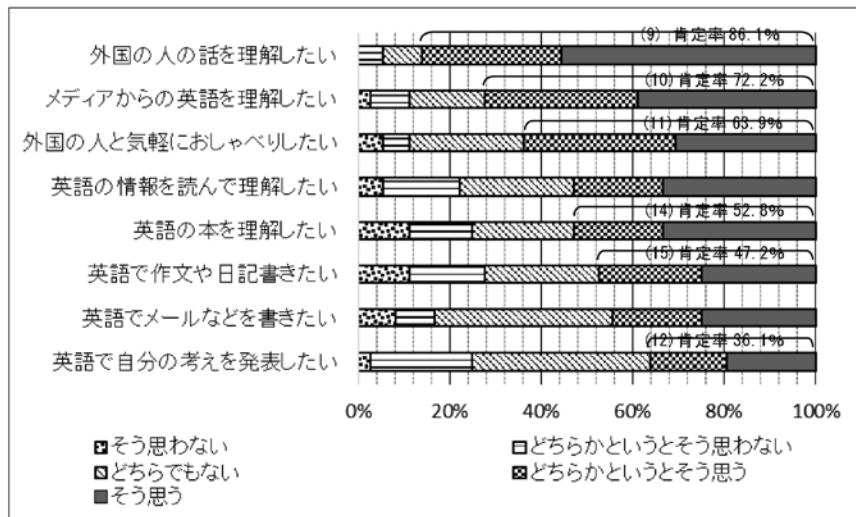


図3 英語技能への意欲 (n=36)

4 モジュール学習の要点

上述した第1回質問紙調査の結果から、多くの生徒が英語に対して高い関心をもっているものの、現状の英語学習には困難を抱えていることが明らかとなった。また、英語学習に関する意識とテスト点数との相関を示した図4からも分かるように、テスト点数が低い生徒ほど、英語学習に対して否定的な考えを抱いている。このため、筆者（梅田）がまず取り組むべきことは、生徒たちの英語に対するバリエーを低くすることであると捉えた。そこで、Edward L. Deci (1999) が提唱する動機づけを高めるための「3つの心理的欲求」⁽⁷⁾を踏まえることにした。すなわち、「自律性への欲求」「有能性への欲求」「関係性への欲求」を満たすための学習活動をモジュール学習に取り入れることにした。

ここで、「自律性への欲求」は、自らが進んで学びたいという心理である。学習者である生徒が、自らの責任で、純粋に楽しめ、ワクワクするような活動を展開する必要がある。「有能

性への欲求」は、「自分はやればできる」「上達したい」と願う心理である。自らの成長を感じられれば、それが自尊感情の高揚につながり、さらに学びたいという気持ちが生まれる。「関係性への欲求」は、友達と一緒に学びたい、先生や友達に助けてもらいたいという心理や実際に得られる安心感である。

そこで、自律性への欲求を満たすために、「課題遂行型言語教育（Task Based Language Teaching）」（以下、TBLT）、有能性への欲求を満たすために「1年次からの復習」、関係性への欲求を満たすために「協働学習（アクティブラーニング）」の3つの教育方法を軸に、モジュール学習をデザインすることにした。また、発達障害などの理由から、学習すること自体に困難を抱えている生徒を支援するために、学習をユニバーサルデザイン（UD）化することにも配慮した。

さらに、英語学習に対して消極的な傾向にある生徒の状況を考え、「苦手を克服するより得意をさらに伸ばす」「生徒の思いを大切にすること」を重視し、生徒が質問紙調査の中で明らかにした「聞くこと」「話すこと」に関する技能向上への強い思いを汲み、最終的なゴールを「英検3級程度の対話力を身に付ける」と設定した。具体的には、上述した「3つの心理的欲求」を軸とする「動機づけの理論」と「学習のユニバーサルデザイン化」を基盤に、「聞くこと」「話すこと」に関する英検3級程度の力として捉えられる次の力を育てることとした。

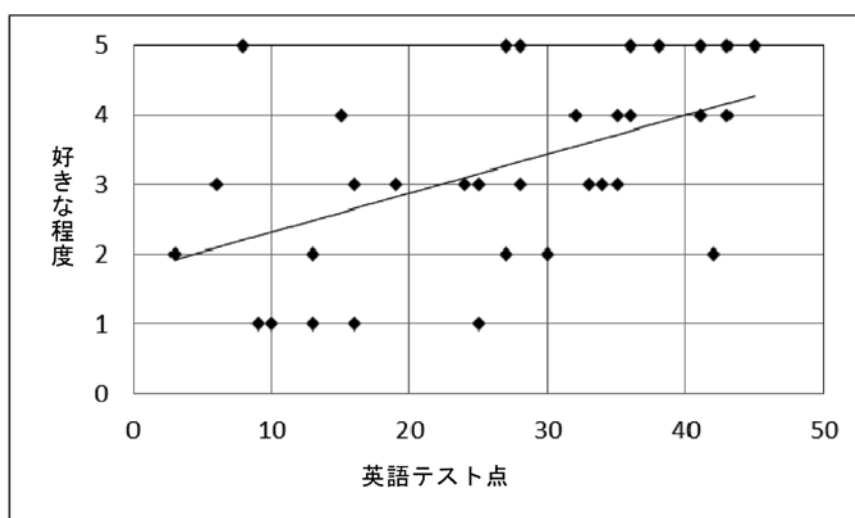


図4 英語学習に対する意識と第3回テスト点数との相関 (n=36)

(図中の直線は回帰直線 (Excelによる))

すなわち、「興味関心のある事柄（趣味、好きな音楽やスポーツなど）について、聞いたり話したりする」「学校、部活、週末のことなど日常生活の身近な事柄について聞いたり、話したりする」「絵の内容について説明したり、内容に関する質問に答える」といったことができる生徒を育てることとした。また、「聞くこと」「話すこと」に焦点化しつつも、英語力全般が向上するように4技能統合型の学習を意識した。ただし、当初における生徒たちの英語学習に対する状況は非常に難しいものであったため、2年時の研究第I期（平成28年1月～3月）における3か月間の目標は、「英語に対する壁を下げる」というように、達成レベルをやや低く設定した。

5 モジュール学習の実践

(1) モジュール学習の流れ

モジュール学習で実施した学習の具体的な流れを表3-1、表3-2に示す。まず、15分間の山場となる課題を「1分間対話活動」と設定し、生徒は事前に準備をしないで、即興的な英語のやり取りを行うことにした。山場に向かって、表3-1に示したように、(1)本時のテーマ(トピック)の確認、(2)対話の参考にするためのリーディング活動(Intake Reading)、(3)ターゲット文の確認を行う。(4)1分間対話活動のあとは、(5)ペアで自分たちの対話を書き出すことで振り返り、(6)ペアで解決できなかった疑問をグループで教え合い、(7)最後に自分の活動の様子を評価する、という基本的な流れを設定した。ここで、1分間対話活動で扱ったテーマは表3-2の通りであり、英語への苦手意識の克服とコミュニケーション活動の活性化のために、対話に必要なとされる主な文法事項は、そのほとんどが1年次の学習内容になるように配慮した。

15分間という限られた時間をフルに活用するため、生徒たちは英語モジュール学習の前後における起立・挨拶の省略、学習に必要なワークシートの事前配布、生徒は学習開始前に机上の準備(筆記用具、教科書、参考書、ワークシート)を完了させておく等の指示により、学習開始前後における必要以上の作業時間を削るようにした。

表3-1 モジュール学習の流れ

内容	時間配分
(1)本日のテーマ紹介	30秒
(2)Intake Reading	2分
(3)ターゲット文の確認	1分
(4)1分間対話活動	1分
(5)振り返り①(ペア)	3分
(6)振り返り②(グループ)	5分
(7)本時のまとめ	3分

表3-2 1分間対話活動のテーマ

テーマ	ターゲット文
①寿司は好きですか?	Do you like sushi?
②親友は何人いますか?	How many good friends do you have?
③好きな教科(本)は?	What subject (book) do you like?
④岡村(平岡)先生は素敵な先生?	Is Mr. Okamura a nice teacher?
⑤君のお気に入りアニメキャラは?	Who is your favorite anime character?
⑥明日どこに行きたい?	Where do you want to go tomorrow?
⑦私と一緒にディズニーに行ってくださいませんか?	Can you go to Disneyland with me? -Sure! / Sorry, I cant.
⑧寿司とハンバーガーはどちらが好き?	Which do you like, sushi or hamburgers?
⑨この冬どこに行った?	Where did you go this winter?

(2) モジュール学習の開発と具体的内容

筆者(梅田)は、i padのプレゼンテーション機能を用いて、モジュール学習を次のように指導した。つまり、本時のテーマを紹介する際には、テーマに沿った画像や映像を、クイズ形式を用いたりしながら大型スクリーンに提示する。これにより、生徒の興味を引きつけることができる。Intake Reading(増田、2011)では、教科書のページをスキャナで取り込んだものや、筆者(梅田)が独自に作成した対話モデルを、スクリーンに映し出す。生徒は、これらを見ながら、教師(梅田)の後に続いて斉読する⁽⁸⁾。この際、中学校外国語指導要領に記載されている強弱や音の連結などのような「音声」に関する内容(文部科学省『中学校学習指導料解説外国語編』2012年、pp.31-33)を意識させるようにする。ターゲット文の確認では、対話を開始する際に用いる疑問文を日本語で提示し、英語でどのように言ったらよいかについて、「個→ペア→全体」の順で生徒に考えさせるようにする。また、会話を継続させるためのアドバイスも同時に確認する。1分間対話活動中はタイマーをスクリーンに示し、生徒たちはタイマーを見て対話時間を毎回記録することにより、対話力の伸びを実感することができるようにした。

その際、ペアとグループによる振り返りと本時のまとめは「英会話ステップアップ表」を用いて行う。生徒たちはペアで自分たちの対話内容を書き出し、表現方法やスペリングなどに関する疑問点について、ペアやグループでの協働作業を通して解決する。まとめとして、自分の取組を、記述式と5段階法の質問に答えることにより振り返るようにする。

このような学習スタイルを毎回繰り返すことで、英語モジュール学習の時間の構造化を図ることができる。加えて、表3-1にあるような授業の流れを黒板に示しておくことで、生徒たちは今やるべきことを目で確認し、作業内容への戸惑いを軽減することができる。板書も構造化し、学習の流れの他にも、教師が使用する Classroom English を日本語とセットで表示しておくようにした。また、その日のうちに、生徒が実際に話した対話文で他の手本となるものや、まとめで記入された「対話力向上のため気づき」を筆者（梅田）が発行する英語通信『ENGLISH NEWS』に記載し、全生徒に配布するようにした。

6 研究第Ⅰ期における英語モジュール学習の成果検証（第2回質問紙調査）

(1) 英語モジュール学習の成果

研究第Ⅰ期における英語モジュール学習の成果を検証するために、平成28年3月9日に2回目の質問紙調査を実施した（調査対象：第2学年36名、有効回答率100%）。質問項目を表5に示す。表5における【 】内の数値は各質問項目の平均値である（5段階法）。全18項目の質問の内、9項目の平均値が4.0以上を示しており、3.5を下回ったものは2項目であった。

図5は、これらの内、英語学習への意識に関する質問項目をグラフ化したものである。第1回質問紙調査で「(1) 英語の勉強が好きか」という質問に対して肯定的回答（「4.どちらかというと思う」＋「5.そう思う」）をした生徒は16名（44.4%）であったのに対し、第2回質問紙調査で「(1) 英語の朝学習に意欲的に取り組むことができた」という項目に対して肯定的回答をした生徒は33名（91.7%）に増加した。

また、第1回質問紙調査においては、「聞くこと」「話すこと」に比べ「読むこと」「書くこと」への向上意欲が低い傾向にあったが、図5に示した結果から、これに関しても変化が見られた。学びたいと思う生徒の肯定的回答の割合は、図3に示した結果と比較すると、「読むこと」に関しては「52.8%→80.6%」、「書くこと」に関しては「47.2%→88.8%」と増加への変化が見られた。さらに、図5における質問項目（9）の結果から、6割以上の生徒が、モジュール学習の中で感じた疑問点を自主的に調べたり、尋ねたりという行動に移したと肯定的に回答した。なお、図5の質問項目（16）から、英語に対する関心度の変化は5割強の生徒に見られたが、元データにより生徒の回答結果を確認すると、もともと興味があった生徒は必ずしも肯定的な回答をしていない傾向にあった。これは、質問項目における文章表現の影響によるもので、英語に対するクラス全体の関心度は、図5（16）の結果よりさらに高いと考えられる。

表5 英語学習の意識（第2回質問紙調査）

質問項目【平均点】
(1)英語の朝学習に意欲的に取り組むことができた。【4.4】
(2)毎回のテーマは興味深いものだった。【4.3】
(3)会話の前に行うリーディング活動は会話の参考になった。【4.6】
(4)積極的に1分間対話活動を行うことができた。【4.1】

- (5)ペアでの振り返りは、疑問点を解決するために役立った。【3.6】
 (6)グループでの活動は、疑問点を解決するために役立った。【3.4】
 (7)授業中、作業（やること）が分からず、困ることがあった（逆転項目）。【3.7】
 (8)1年生の内容に取り組むことで、自分の英語力への自信が高まった。【3.9】
 (9)英語の朝学習で感じた疑問を解決するために自分で調べたり人に聞いたりした。【3.7】
 (10)「ENGLISH NEWS」を興味深く読んだ。【3.4】
 (11)英語の朝学習に取り組むことで、英語を話す力が、以前より伸びたと感じる。【4.0】
 (12)英語の朝学習に取り組むことで、英語を聞く力が、以前より伸びたと感じる。【4.0】
 (13)英語の朝学習に取り組むことで、英語を書く力が、以前より伸びたと感じる。【3.8】
 (14)英語の朝学習に取り組むことで、英語を読む力が伸びたと感じる。【3.7】
 (15)英語の朝学習を続けていけば、自分の英語の力が伸びていくと感じる。【4.1】
 (16)英語の朝学習が始まる前に比べて、英語に対する興味が深まった。【3.7】
 (17)朝学習で対話活動の他にも、「書く力」を伸ばすための活動を行いたい。【4.4】
 (18)朝学習で対話活動の他にも、「読む力」を伸ばすための活動を行いたい。【4.2】

ここで、さらに分析を深めるために、英語学習に対して非常に難しさを感じている生徒達の意識を検討する。抽出生徒は、第2回質問紙調査の「(1) 英語の勉強が好きだ」と「(6) 英語の勉強は他の教科と比べて得意である」という項目のいずれかに1または2と答えた生徒である。抽出された生徒8名（A、B、C、D、E、F、G、H）の意識変化から、モジュール学習の効果を考察する。「英語への意欲」「読むこと」への意識」「書くこと」への意識について、8名の第1回質問紙調査と第2回質問紙調査における回答の比較を表6に示す。表の各欄右側（灰色で塗りつぶしている欄）が第2回の数値である。質問項目は表3と表5に示した項目に対応している。表6から、8名全員が全ての質問に対する回答において、肯定的な意識変化が見られることが分かる。8名は英語学習に対して非常に難しさを感じている生徒ばかりであったので、この数値の変化には意味がある。中でも、対話力向上が著しかったA、中盤に失速したものの前半と後半は及第点を示したCの意識変化は著しい。Aについては、第2回調査で3項目全てに5を付けている。

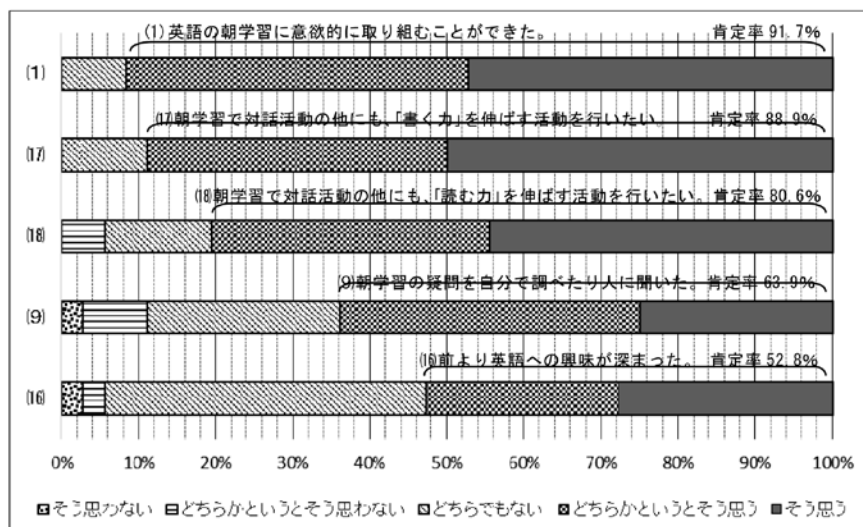


図5 英語学習に対する意識（第2回質問紙調査、n=36）

表6 抽出生徒8名の英語学習への意識に関する数値の変化（5段階法、第1回左側、第2回右側）

質問項目	英語学習の意欲		「読むこと」の向上意欲		「書くこと」の向上意欲	
	(1)	(1)	(13)(14)平均	(18)	(15)(16)平均	(17)
生徒 A	1	5	1.5	5	2	5
生徒 B	1	4	4	4	3.5	4
生徒 C	1	5	3	5	2	5
生徒 D	3	5	1.5	5	3	5
生徒 E	4	5	5	5	4.5	5
生徒 F	1	3	5	5	4.5	5
生徒 G	5	5	5	5	5	5
生徒 H	2	4	4	4	2	3

このように、モジュール学習実施前後に行った質問紙調査における類似項目の回答結果を比較すると、抽出生徒8名全員が、1回目よりも2回目の数値が大幅に上がっていることから、モジュール学習の方法が生徒たちの英語学習に対する意識を改善するために効果的であったといえる。そこで、次では、抽出生徒だけでなく生徒全員のデータについてその要因を具体的に考察する。

(2) 生徒の意識変化をもたらした要因

先述した通り、モジュール学習は、Edward L. Deci (1999) が提唱した、動機づけを高めるための「3つの心理的欲求」である、「自律性への欲求」「有能性への欲求」「関係性への欲求」を満たすための学習活動を取り入れるとともに、学習に困難を抱えている生徒のために学習のユニバーサルデザイン化 (UD化) を図るよう心掛けた。そこで、第2回質問紙調査では、表3-1に示したモジュール学習の各活動に対応する質問項目を入れてある。表5の(2)から(8)の質問項目がそれぞれであり、この内、(7)は学習のユニバーサルデザイン化に関する質問項目である。これらの質問項目に対する回答は、英語モジュール学習に対する生徒の意識を表すとともに、英語モジュール学習に対する生徒の評価も表していると考えられる。さらに、『ENGLISH NEWS』への興味を問う質問項目(10)を加えて、英語学習に対する意識を明らかにすることにした。

図6は英語学習の方法に関する意識についての質問項目の回答結果をまとめたグラフである。

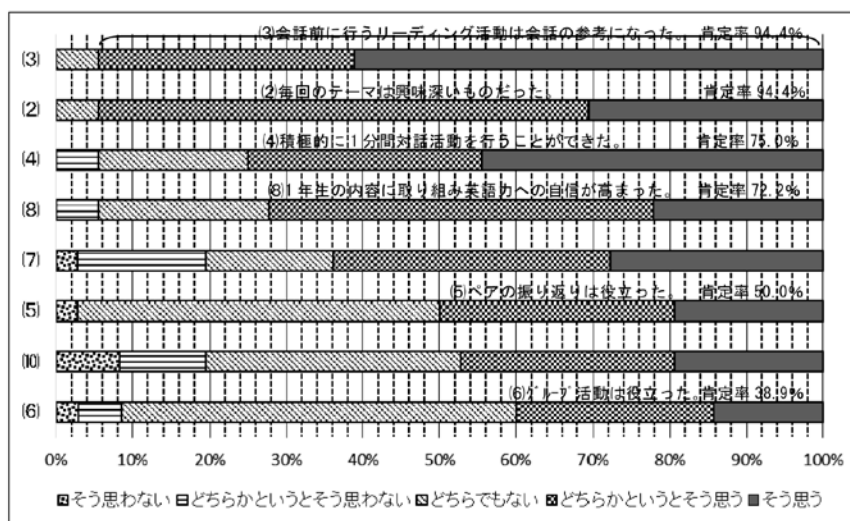


図6 英語学習の方法に関する意識（第2回質問紙調査）

表5に示した各項目の平均点および図6から分かるように、生徒たちからの評価が最も高かったのは、Intake Readingとして行った「(3) リーディング活動」(肯定率94.4%)である。英語教員が陥りがちな失敗として、大枠のトピックのみを与えて、いきなり会話を要求したり、まとまりのある英文を書かせたりすることがある。英語の基礎力がある程度身に付いた生徒ならば、既習事項を駆使し、何とか課題を成し遂げることができるが、英語力の定着度が低い生徒にとっては学習レベルが高すぎる。そのような生徒にとっては、課題を遂行するための手が必要である。Intake Readingは、教科書『TOTAL ENGLISH 1』の本文や既習表現をもとに、筆者(梅田)が作成した対話モデルを斉読する活動である。Input Reading としていないのは、ここで紹介した英文は生徒が全て過去に触れたことがあるものであるものであるので、inputとしての役割機能より、intakeとしてとしての役割機能が求められるからである。今回、過去に学習した表現に再び触れることで、「内在化」が促された生徒も多いはずである。Inputとして与えられる英語は、学習者にとって難しすぎず、簡単すぎず、学習者の英語力を若干上回るレベルのものが良いとされているので、この点からも、リーディング活動で使用した対話モデルは適切であったといえる。このことから、リーディング活動で使用した対話モデルの適切性が、英語学習に対する生徒の意識変化をもたらした要因の一つであるといえる。

次に注目するのは動機づけのための3つの欲求を満たすために設定した活動である。「自律性への欲求」を満たすために、TBLTを取り入れた活動を行った。今回の学習は毎回テーマ(トピック)を変えながら「1分間対話活動」を行った。毎回の「(2) テーマ内容」と「(4) 1分間対話活動」に対して肯定意見を示した生徒の割合はそれぞれ、94.4%と75.0%であり、この欲求を満たすうえで効果的であったといえる。特にテーマに関しては、36名中34名が興味深かったと回答しており、生徒の目線に立ってテーマを選定した結果といえる。「有能性への欲求」を満たすためには、1年次の復習をモジュール学習の中に設定したことである。1年次の復習を取り入れた点については、「(8) 1年次の復習」(肯定率72.2%)から分かるように、7割以上の生徒が1年生の復習をしたことで自信がついたと回答した。これらのことから、「自律性への欲求」を満たすためにTBLTを取り入れた活動を行ったこと、そして、「有能性への欲求」を満たすために1年次の復習をモジュール学習の中に設定したことは、英語学習に対する生徒の意識変化をもたらした要因であるといえる。

しかしながら、「関係性への欲求」を満たすべく取り入れた協働学習に関しては、図6から分かるように、「(5) ペア活動」、「(6) グループ活動」に対しての肯定率が、それぞれ50.0%と38.9%であり、期待したほどの効果が得られなかった。佐藤(2006)は、グループ活動が成功するための条件の一つとして、取り組む問題が難解であることが必要性なことを挙げている⁽⁹⁾。個人では解決が困難な課題にグループで取り組むことによって、達成感やグループ活動の有用感が感じられるという指摘である。今回のグループ活動ではそもそも協働で取り組まなければ解決が困難な課題が設定されておらず、その有用性が感じられなかったがための結果だったと考えられる。ペア活動やグループ活動を効果的な学習として成立させるためには、生徒の複数人の知恵が集結し、それによって学びが深まっていくような課題設定が不可欠である。対話活動を書き出すという作業は、ペア間においては相談の必要性があるが、グループ間ではその必要性が低くなる。グループで一つのスクリプトを完成させることが目的ならば、協働学習の必要性が生じるが、今回のタスクはあくまでも「1分間対話活動」であるので、ライティングの正確性を必ずしも求めなかった。そのため、グループ学習が活性化しなかったと考えられる。

(3) 各質問項目間の関連

次いで、第2回質問紙調査で用いた全18項目の質問のうち、平均値が他に比べ比較的低かった「(9)英語の朝学習で感じた疑問を解決するために自分で調べたり人に聞いたりした」「(10)『ENGLISH NEWS』を興味深く読んだ」「(16)英語の朝学習が始まる前に比べて、英語に対する興味が深まった」の3項目が、他の質問項目との間にどのような相関が見られるか検証する。

表7は、上述した質問項目の(9)(10)(16)に対応する「自立学習」「ENGLISH NEWS」「興味深化」について、モジュール学習の流れに関する質問項目と(2)～(8)、(9)、(10)との相関を示したものである。

表7から、まず、自立学習に関しては、1年次の復習 ($r=0.550$, $p<0.05$)、『ENGLISH NEWS』 ($r=0.584$, $p<0.01$) との間に有意な正の相関がみられた。『ENGLISH NEWS』を意欲的に読んだかという質問に関する平均値は、全項目の中で最も低く、筆者の期待を大幅に下回ったが、この相関係数から、モジュール学習で感じた疑問を解決するために、自立的に学習行動を起こした生徒は、その手段として『ENGLISH NEWS』を読んだ傾向にあるといえる。また、1年次の復習により自信を付けた生徒が、モジュール学習で感じた疑問を解決しようと、自立的な学習活動を起こす傾向にあるといえる。

次に、『ENGLISH NEWS』に関しては、テーマ ($r=0.413$, $p<0.05$)、1年次の復習 ($r=0.609$, $p<0.01$) との間に有意な正の相関がみられた。『ENGLISH NEWS』には、本時のテーマや対話時のアドバイス、ある生徒が実際に話したモデル対話、振り返りとして生徒が自由記述した感想を掲載した。テーマに興味をもったからこの英語通信を読んだのか、英語通信を読んだから更にテーマに興味をもったのかという因果関係は定かではないが、双方に相関的な関連があるといえる。また、『ENGLISH NEWS』を読んだことと1年次の復習をしたことによる自信獲得との関連は、前者が後者に対して影響を及ぼしているといえる。自分や他者の対話内容や、他者の気づきが視覚化され、それらに触れることで、英語力の内在化が生じ、自信獲得へとつながったと考えられる。

そして、興味深化に関しては、モジュール学習に取り入れた教授法、学習内容、支援に関する質問項目のほぼ全てに対して有意な正の相関が見られた。すなわち、テーマ ($r=0.442$, $p<0.01$)、『Intake Reading』 ($r=0.462$, $p<0.01$)、ペア活動 ($r=0.591$, $p<0.01$)、グループ活動 ($r=0.414$, $p<0.05$)、UD化 ($r=0.430$, $p<0.05$)、1年時復習 ($r=0.592$, $p<0.01$)、『ENGLISH NEWS』 ($r=0.558$, $p<0.01$) との間で有意な正の相関が見られた。モジュール学習を体験したことによって、英語への興味が以前に比べ深まったと答えた生徒の割合は5割強であるが、これらの相関を見ると、興味が深まったと回答した生徒に対しては、「毎回のテーマ」「Intake Reading」「ペア活動」「グループ活動」「学習のUD化」「1年次の復習」、そして、『ENGLISH NEWS』が少なからず影響を及ぼしたといえる。特に、「ペア活動」「グループ活動」等の協働学習や「学習のUD化」については、英語科に限らず、全ての教科及び教育活動において、有効に活用されるべき内容である。

表7 平均値が低かった項目に関する相関係数 (n=36)

	テーマ	Intake Reading	一分間対話活動	ペア活動	グループ活動	UD化	一年次復習	自立学習	[ENGLISH NEWS]
自立学習	0.319	0.379*	0.385*	0.270	0.273	0.060	0.550*		0.584**
[ENGLISH NEWS]	0.413*	0.122	0.043	0.380*	0.057	0.235	0.609**		
興味深化	0.442**	0.462**	0.336*	0.591**	0.414*	0.430**	0.592**	0.290	0.558**

** p<0.01、 * p<0.05

(4) 英語モジュール学習に対する生徒の自己評価

図7は、英語4技能の向上に対する生徒の自己評価を示したグラフである。棒グラフ左側の()の数字は表5に示した質問項目の番号に対応している。モジュール学習では「聞くこと」「話すこと」に焦点化しつつも、「読むこと」「書くこと」の活動を取り入れた4技能統合型の学習活動を展開した。図7の中で、最も肯定率が高かったのは、「(15) 英語の朝学習を続けていけば、自分の英語の力が伸びていくと感じる」(肯定率80.1%)であった。これを4技能のそれぞれで見ると、「(11) 話すこと」「(12) 聞くこと」「(13) 書くこと」「(14) 読むこと」の力の伸びを感じた生徒の割合はそれぞれ、72.2%、66.7%、58.3%、61.1%であり、モジュール学習の中心となる「聞くこと」「話すこと」の2つの技能以外の「読むこと」「書くこと」の技能に関しても、成長を感じた生徒が約6割に及んだ。

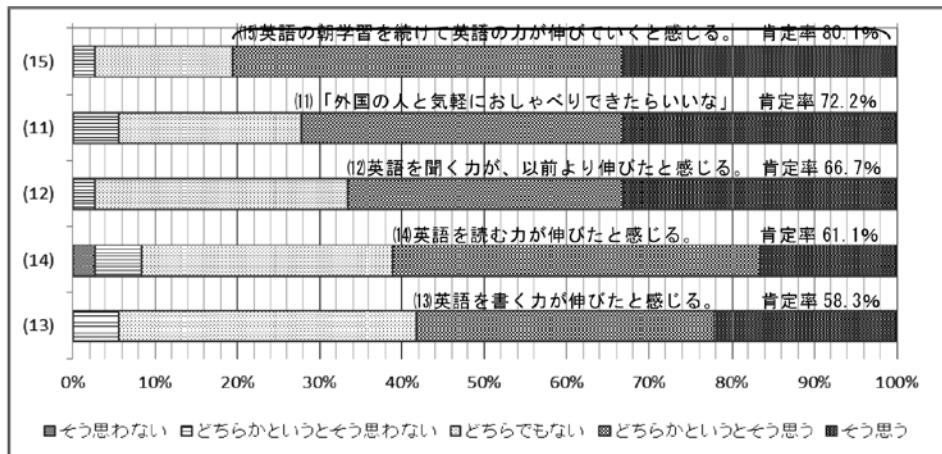


図7 モジュール学習を経た生徒の自己評価

次に、4技能の項目間の関連を相関係数で示したものが表8である。いずれの項目間においても正の相関が見られ、中でも「書く力の向上感」と「話す力の向上感」($r=0.719, p<0.01$)、「読む力の向上感」と「聞く力の向上感」($r=0.700, p<0.01$)に強い正の相関が見られた。前者はoutput、後者はinputのための技能という点で関連がある。これらの相関係数により、生徒の英語4技能は互いに関連しながら向上しているといえる。

表8 4技能の伸びに関する相関係数 (n=36)

	話す力	聞く力	書く力	読む力
話す力				
聞く力	0.566**			
書く力	0.719**	0.566**		
読む力	0.449**	0.700**	0.582**	

**p<0.01、 * p<0.05

(5) 英語モジュール学習の意欲に影響する要因

以上の分析を踏まえると、英語モジュール学習に関する総合的な効果の意味を持つ「(1) 英語モジュール学習の意欲」に対して、他の項目がどのように影響しているかを調べるのが、今後における指導方法の改善のために重要である。それを調べるために、「(1) 英語モジュール学習の意欲」の項目を従属変数、他の項目を独立変数として重回帰分析を施し、影響関係を検討した。重回帰分析では、授業の内容・方法に関する質問項目である(2)～(10)を独立変数にした場合と、学習の関心・意欲に関する質問項目である(11)～(18)を独立変数にした場合との2種類を行った。

その結果、まず、授業の内容・方法に関する質問項目である(2)～(10)からの有意な寄与は見られなかった。

次に、「(1) 英語モジュール学習の意欲」に対して、学習の関心・意欲に関する質問項目である(11)～(18)からの影響関係を調べた。その結果、表9に示したような有意な寄与が見られた。

表9 重回帰分析の結果

従属変数 : (1)英語モジュール学習の意欲		β	t	p
独立変数	(11)英語を話す力が以前より伸びたと感じる	-0.066	-0.292	
	(12)英語を聞く力が以前より伸びたと感じる	0.058	0.245	
	(13)英語を書く力が以前より伸びたと感じる	0.386	1.727	+
	(14)英語を読む力が伸びたと感じる	-0.214	-1.066	
	(15)自分の英語の力が伸びていくと感じる	0.464	2.077	*
	(16)前に比べて英語に対する興味が深まった	0.055	0.256	
	(17)他にも「書く力」を伸ばすための活動を行いたい	0.257	1.365	
	(18)他にも「読む力」を伸ばすための活動を行いたい	-0.193	-1.064	
$R^2=0.375$		$F=3.621^{**}$	$+p<0.10$	$* p<0.05$

表9に示したように、標準偏回帰係数 β に関して、「(13) 英語を書く力が以前より伸びたと感じる」から有意傾向が、「(15) 自分の英語の力が伸びていくと感じる」から有意差が見られた。このことから、英語を書く力が伸びたと感じていること、これからも英語の力が伸びていくと実感していることが、英語モジュール学習への意欲に繋がっていると考えられる。この結果は、実践した英語モジュール学習の内容および指導者(梅田)の印象と一致するものである。

6 本研究の結論と今後の課題

(1) 本研究の結論

本研究では、次期学習指導要領の動向を踏まえ、教職大学院の実習システムを活用した英語モジュール学習を開発し実践するとともに、質問紙調査によってその成果を検証した。静岡県K市A中学校を事例校として、開発・実践した英語モジュール学習は、事前に行った第1回質問紙調査により、当初は実施上の困難が予想されたものの、動機づけの理論、学習のユニバーサルデザイン化の考えを取り入れることにより、学習活動が円滑に進んだ。最終的に生徒の意識変容が見られ、生徒の英語に対する苦手意識が軽減したといえる。

本研究の主な結論として、以下の3点を挙げるができる。

第1に、教職大学院の現状を踏まえたうえで、現職院生が在籍する地域と連携した貢献性の高い実習カリキュラムとして、英語モジュール学習の方法を開発した。英語モジュール学習の開発に当たっては、第1回質問紙調査の結果を踏まえ、英語学習に消極的な生徒の状況や「学習のユニバーサルデザイン化」に配慮した。Edward L. Deci (1999) が提唱する、動機づけを高めるための「3つの心理的欲求」である「自律性への欲求」「有能性の欲求」「関係性への欲求」を満たすための学習活動を取り入れたアクティブラーニング型の学習を開発した。

第2に、英語モジュール学習の具体的方法として、(1)本時のテーマ(トピック)の確認、(2)対話の参考にするためのリーディング活動(Intake Reading)、(3)ターゲット文の確認、(4)1分間対話活動、(5)ペアで自分たちの対話を書き出すことで振り返り、(6)ペアで解決できなかった疑問をグループで教え合う、(7)最後に自分の活動の様子を評価する、という7つのプロセスを設定して学習の流れを構造化した。1分間対話活動の内容については、文法事項にも配慮しつつ、生徒同士のコミュニケーションの円滑化を第一とすることが重要である。

第3に、英語モジュール学習の成果として、9割以上の生徒が英語モジュール学習としての朝学習に意欲的に取り組むことができた。第1回質問紙調査の結果では、「聞くこと」「話すこと」に比べ「読むこと」「書くこと」への向上意欲が低い傾向が見られたが、第2回質問紙調査の結果、「読むこと」「書くこと」ともに約30%の増加への変化が見られた。さらに、6割以上の生徒が、モジュール学習の中で感じた疑問点を自主的に調べたり、尋ねたりという行動に移したと肯定的に回答した。

(2) 今後の課題と展望

今後の課題として次の2点を挙げるができる。

第1に、平成28年4月から開始する英語モジュール学習に関する研究第Ⅱ期(平成28年4月～7月)においては、1分間対話活動より一歩踏み込み、まとまりのある英語を発話する機会を設けることが今後の課題である。そのため、学校生活や日常生活について、英語で紹介したり聞いたりすることを、自信をもって行える生徒を育てていくことが重要になる。

第2に、筆者等がアクションリサーチ(AR)として取り組む英語モジュール学習が終了した後も、A中学校で英語学習が継続的に行われ、A中学校の特色の一つとなるよう、組織体制を整える必要がある。そのためには、A中学校区の地域組織である「協働のまちづくり協議会」と連携し、地域住民や地域企業人の中から本実践と同様のモジュール学習を指導できる協力者を発掘することが重要な課題である。

最後に、今後の展望として、教員養成高度化の動向の中で、教職大学院は地域と連携した一層貢献性の高い実習カリキュラムを開発していくことが重要である。図8に示したように、現

職院生は、指導教員の専門性を生かして、「学校における実習」を通して、学校や地域が抱える課題を解決するプロセスに参画する。その際、解決のプロセスと成果をモデル化することにより、解決方法を地域全体へ拡大することや他地域での活用可能性を高めることとする。

これにより、現職院生および指導教員は、課題解決モデルの汎用システムの開発を行うようにすることが重要である。「学校における実習」を通して、教職大学院の人的資源と

して指導教員および現職院生を実習校へ投入することによって、実習校を課題解決のモデル校へ転換していく可能性を開くことができる。その中で、現職院生の能力として、課題発見力、課題解決力、リーダーシップ、学習モデル開発力、課題解決のシステム開発力等が養われることになる。また、このようなプロセスを通して、教職大学院における「学校における実習」カリキュラムの改善をはじめとして、大学と地域との関わりを中心とした大学カリキュラムの改善を図るのである。

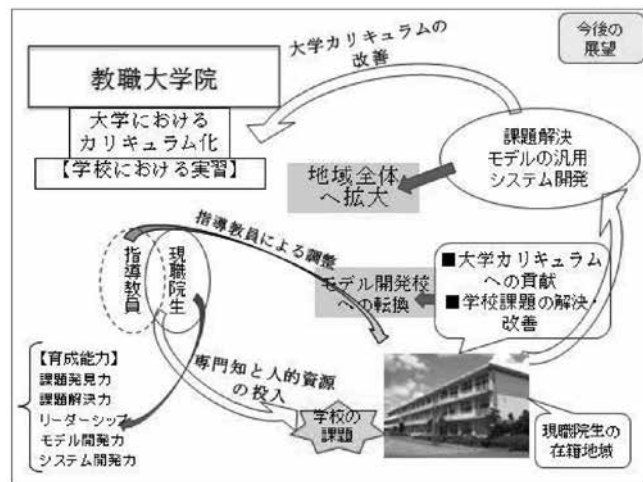


図8 教職大学院のカリキュラムと地域連携

(謝辞) 本研究の推進に当たり、事例校である静岡県K市立A中学校のS校長、および英語科主任のM教諭には、多大なご協力を賜りました。ここに記して、感謝申し上げます。

【注】

- (1) 山崎・島田・三ツ谷・古山・高塚・法月・本荘・水田 (2015) 「教育課程経営の実践的指導力とビジョン形成力の向上に関する研究—教員研修の高度化を目指した教職大学院授業に基づいて—」『静岡大学教育実践総合センター紀要』No.23、pp.123-132.
- (2) 山崎保寿・武井敦史 (編集担当) 『平成24年度教員研修モデルカリキュラム開発プログラム—大学と教育委員会の連携・協働による研究カリキュラム開発事業— 報告書』静岡大学大学院教育学研究科教育実践高度化専攻、2013年3月
- (3) 大学生に実施したアクティブラーニングの効果については、入江 (2015) が明らかにしているが、教職大学院の実習を活用した例は少ない。(入江詩子 (2015) 「アクティブラーニング導入期における参加型学習の役割」長崎ウエスレヤン大学『地域総研紀要』第13巻1号、pp.23-34.)
- (4) 岩崎香織「中学校英語科における学習スタイルをふまえた指導法の効果」島根大学大学院教育学研究科編『「現職短期1年コース」課題研究成果論集』第5号、2014年、pp.73-82.
- (5) 本研究で扱った実践および検証については、主に研究第I期に関するものである。第1回質問紙調査を研究第I期の事前に、第2回質問紙調査を研究第I期の終了時に実施したものである。
- (6) 2014年にベネッセが行った調査によると、「英語ができると就職に役立つ」「いい高校に入る

りやすい」という質問に対して肯定的に回答した中学生の割合はそれぞれ86.1%、84.7%であった。

- (7) エドワード・L・デン,リチャード・フラスト,桜井茂男(監訳)『人を伸ばす力—内発と自律のすすめ—』新曜社、1999年
- (8) 増田とよ子「第2章 必修教科等の研究 9英語 コミュニケーション能力と英語の表現力を育てる授業: Intake Reading から高める実践的コミュニケーション能力」『滋賀大学教育学部附属中学校研究紀要』第53集、2011年、pp.134-141.
- (9) 佐藤学『学校の挑戦—学びの共同体を創る』小学館、2006年